

## 「母が付き合ってくれた時間」 —梅雨の合間に—

紅かなめもちの赤い若葉がきれいな季節となった。

母の施設に週ごとの面会に行く。

入道雲が気になり、遠出は無理そうな午後の日曜日だ。

母は近頃、娘（私と妹）の顔は覚えていないようだ。

昼寝をしてしまうと、夜、寝なくなり、他人の部屋に入ってしまったたり、一人でフロアを徘徊してしまうので、昼間は自室に入れないように施錠をされている。いつも、共通のリビングで、車椅子に乗り、所在無げにぼうっとしている。

以前の母であれば、朝は起きず、昼寝もたっぷりし、夜は遅くなるほどに元気になり、キャッチホンをつけて友人・知人と長電話をし、深夜放送を聞き、書き物をし、自由に、自由に生きていた。誰からも拘束されなかった。

もし、頭がしっかりとしていたなら、身体が不自由であっても、生活を色々工夫し、介護保険を駆使して独りでやって行くことができたはず。それを考えると、残念だな、という気持ちもわくが、いや、見栄っ張りの母にとっては、思うように動かない身体、嚙下障害、老いていく自身の姿にストレスを溜めこむ不幸から回避されて、良いことだって沢山あるじゃないか、とも考える。

ちょっと、散歩に行こうか！と声をかけると、

「靴をはかせて」と即座にかえってきた。

施設のなかで、ベッドに入る時以外は靴を履いている生活を続けているため、窮屈なのだろう。なにかと足元に靴を脱ぎ棄てている事が多い。

出かけるなら、靴が必要、と考えがいったらしい。

この前の散歩の時は、交差点の上を指して、「御成門」と声を出して読んだ。

そう、御成門よ。ちゃんと読めるのね。と言って笑いあった。

習字の時間が時々あるが、字もちゃんと書ける。毛筆で自分の名前も書ける。

お名前は？と聞いても、ハテナ？と首を捻るのだが、貴方の名前を書いて下さい、と言われると、書ける。

何が出来るのか、と色々試す気はないのだが、ちょっとした事でまだ記憶が残っているな、と感じられるのは、嬉しい事だ。

靴を履く発想も、そうそう、ちゃんと履いていきましょうね、と、こちらも少しウキウキする。

ちょっと10分位外に、と申し出たら、一応きちんと外出届けを書いて下さい、と言われた。

なかなか不自由なものだ。しかし、大勢の命を預かっている、と考えれば、しかたないかもしれない。施設の周りを、車椅子を押してぐるりと周る。

額アジサイがきれいだ。これは、取ってはいけないので、写真で撮るね。



施設の生け垣の、紅かなめもちの赤い新葉が光っている。

そうだ、独り暮らしで自由に散歩が出来ていたころ、この新葉をいくつか持ち帰って飾っていたよね。

「他所様のを、すみません、少しいただきます、って小さい声で断って頂いてきちゃった」と悪戯っぽく笑って大事に部屋に飾っていたけれど、ちょっとだけでも思いだせるかな。昨日の雨で、瑞々しく光っている葉を、一本折って、母に渡すと、ニコッと笑って早速自分で胸に挿す。6月は梅雨時で、ついうす暗いイメージをもってしまいが、実は色彩豊かな季節であることを認識する



もう一つ、群生する白いつゆ草らしい花も敷地の中に咲いていた。

これも沢山あるので一本勝手にいただく。白い色が鮮やかで、小さな小さな花だ。

後で調べると、これは常盤つゆ草<sup>とぎわ</sup>という種類だった。

三角形の花の形が蝶のようで、不思議だ。



ランタナ (和名 七変化しちへんげ)。

この花も、すぐ近くに咲いていて、後で名前を調べたもの。



ピンポン玉より少し大きいくらい、小ぶりだが、華やかな花の色だ。

葉がアジサイに似ているので、仲間かと思ったが、別種。

開花後、次第に花の色が変わるので、日本名が七変化というそうだ。

もう、母に花の名前が判ったよ、と告げても、ふーん、そうだったの、とも言わない。  
少し前までは、帰る時握手して、又来るね、と言うと、「又来てね」と言って廊下を曲がる  
まで手を振ってくれていたけれど、このところは手を振らなくなった。  
離れた途端に、プチッと回線が切れて、忘れてしまうようだ。  
もう、手は振らないのだろうか。

小さな散歩の中で、今まで通り過ぎていたものに、ふと立ち止まって目を向けると、違う  
景色が広がってくる。

今日、一緒に散歩した時間は、「私が母を連れて行ってあげた時間」なのではなく、「母が  
私に付き合ってくれた時間」なのかもしれない。

母が、近頃、何か透明な存在に変わっていくのを不思議な気持ちで眺めている。

2012. 6. 10